



2022年4月 Tajimist

5年間で変わったこと

多治見市民病院の病院長を任されて早いもので丸5年が経ちました。厚生会が指定管理を受けてから12年、新病院に移ってからもう10年になります。私が着任する前7年間と着任後の5年間で大きく変わったことをまとめてみます。

- ①職員一人一人が、単なる作業ではなく、考えながら仕事をするようになりました。自分たちでいろいろなアイデアを出し、患者さん・ご家族のためになること、また病院のことを考えるようになりました。
- ②若い医師・職員が増え、育てることを厭わなくなりました。成長する姿をみて喜びを感じるようになってきました。
- ③患者さん・ご家族から感謝の手紙をもらうことが多くなりました。もちろん、時々、叱咤・激励のお手紙もありますが、圧倒的に前者が多く、職員掲示板に貼って皆で喜びを共有しています。
- ④救急車の受け入れ数も、年間2000台を超えてきました。1次・2次救急は多治見市民病院、3次救急・高度救命は県立多治見病院と両病院の連携が良好になりました。

多治見市民病院 病院長

今井 裕一 Hirokazu Imai



- ⑤最近2年間は、新型コロナウイルスにも対応していますが、これまで400名弱の入院患者の診療にあたりました。

その他、発熱外来、接触者外来、妊婦PCR検査、さらには、ワクチンの接種も行いました。新型コロナウイルスに真正面から立ち向かいました。

- ⑥医師会の先生からの紹介も増えてきています。当院でできること、県立多治見病院でできることを選び分け、医療の選択肢が増えたことは、市民にとっても良いことと思います。

新型コロナが流行する3カ月前には、厚労省の地域医療構想で再編すべき病院として名指しされました。いまだその議論の結論は出されていません。しかし多治見市民病院と県立多治見病院の両者が存在してはじめて、人口10万人の多治見市の医療が成り立つことが証明されつつあります。今後とも多治見市の病める人のために日々向上に努めたいと思います。引き続き、ご支援をお願い申し上げます。